



70

65

60

55

50

45

木利
門跡卷
543
6



詞瓊綸六え巻

むまび辭

組繞三猪口十三版。又その下うあらじとまで結び。緒
出せり。主中にあらじとてなれ辭ハ。もとどき

志

き

おも従第一版よりお五版まで

志

き

おも従第一版よりお五版まで



あふよをもときとお被る言に三つのよと有。一。は組繞第一版。右。り、
志。中。ひき。左。ね。二。はお二版。右。り。志。中。ひき。左。ね。
三。はお三版。右。り。き。中。ひ。志。左。ね。三。は四版。左。ね。三。は五版。左。ね。
三。は三つめ中に上二版。左。の。あ。と。り。も。や。院主の。あ。下三版。左。三。お。ひ。ま。ハ。い。そ
ゆ。こちの。あ。う。と。後。世。の。名。目。ふ。寺。の。モ。院主。正。の。称。き。て。き。よ。ハ。い。称。あ。る。と。き。う。と。
あ。ま。ち。と。て。上。の。て。ふ。を。も。に。あ。と。ぎ。ひ。て。か。く。る。の。ふ。を。う。と。き。と。ハ。全。く。日。下。く。て。き。ふ。と
あ。の。だ。く。ば。生。き。の。き。へ。う。と。バ。上。二。版。の。き。ハ。假。主。の。き。い。い。ぐ。べ。く。ト。三。版。の。き。ハ。ご。ま。の。き。い。い。

○玉のを六

べきよかくて上二段ハもとほのうきの時あと落び。ぞのや何のかつて落
きと落ぶ。下三段をうちへても色ほのからぬ落び。ぞのや
何のからぬ時あと落ぶ。はるか御まほうがくはまだひゆき。廻縫
オ一のナエのニ竹縫すと落とく考へ合せでいさぎよべー。

ぞ

ぬ

第十六段

○不のいまと御ぬをかひてしもきはあといふ。せトのねしもとおも上
のと小もとおもと同トして。いとほの落びあり。上ノぞのや何と
おもてハ。おもとしもととおも

○もとおもと落びを。せトとりひぬとくも落びを。せぬとりふりうり。おい

せト紙せト紙せトづきせト。巻せぬ紙せぬづきせぬ消せぬすどのめー。もととい
ふはも此様至也此せと為のうこし。美琴ふるえを元せぬとつう。又ほ民かうを
うちもとと。えまみるをうれし小恭もまれ。うんきうもとと。おもとと。おもせと
もととと。日トととをし。福川石そ秋のうよとまきと。おもととととと

なう玉

たる

なま

第十九段

○ぬうりと。上ヌぬ。星ぬ。をもきて毛つひ。又おもとつきうまく。つを、
もとうり。皆うるうと同ト。

○ぐくを。あく。道へあ榮と。一つと。そくを。又後まくまく
よまな辞う。ふたと古ちまのぬりあよへとく。おも。

○一つのあう玉

○玉のを六

二

新二
書き集

○ こが宿泊の あす

新二
宿泊はくとひらをばえてそぞめざりされ
のあそはまみぐとつとし。ほくとまくまにうそとあかりるぐもす
ぞくへ年に一よやよとくちくん。ばくわうあくも。あくわくをほ
そくそく。ほくとまくはまく。まくとくとくとくとくとくとくとく
まくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

○ あふなととそら先へとくねり。二の坐を交換の故ふかをす

三五

三六

三七

十一便

○ あふと上ふをあきとつひえて坐してをぎとじゆうり。
まくけて坐とお時のとを獨どてよじもむとと例う。とくはく
とくべきあり。告くまき

○ あふと下ふをあきとつひとくま

○ あふとあらかじめありときとくまきあり。まき例うとくま

○ あふとあらかじめありとくまき。古にまくくらむ。あくハあふぞうりの。ぞあと
をつて坐てざりとくま。不有来よ
さくとくまとづく。不有來よ
をつて坐てざりとづく。不有來よ
さくとくまとづく。不有來よ
例もあくとくまとづく。不有來よ
さくとくまとづく。不有來よ
さくとくまとづく。不有來よ
さくとくまとづく。不有來よ
ひふとくまとくまとづく。不有來よ
○ あーとくま

舊註
六 吾物うとをうとあくまとはあよりまにふ人あくま
金口 まくまくまをあまつとあくまうとくま
○ 五のを六

三五

○ 五のを六

○三

おお十六
殿もつて大輔 ほのうあと引導乃極けはあらふう耶
うけりをあらそひハ東洋

十六
信
傳
記
卷
第
一
三
三

日一
ちゆゑべく先のさうりになりに坐す
ふのもとかかはまくす

おもひみよ根のよきうけおどす清風川のよきよき流

かへりゆくやうに、廻ルモリ等、
まことにあくにが、二年後

日
防寒入室ひ田舎うきをりて尔
多幸
おもて免縲尔あそぶわく

好之
朱 告子アリハアリシテモヒトモ
タリヨウノモモシテモセキ

This image shows a vertical strip of aged, yellowish-brown paper. The paper has a textured appearance with some minor discoloration and small dark spots, characteristic of old paper. There is a visible vertical crease or fold line running down the center of the strip. At the top, there are two small, irregular holes, possibly from insects or damage. The overall color is a light tan or beige.

ぬ
ぬふ

あら早ぬく。ぬるぬれ
と同ド 美榮に去。字を出て。お爾ぬ絲

さうすまうへ、かんきをみでるやうをやうどのみえ、おきおきおきおきおき

正月の事と申す。此の事は、
正月の事と申す。此の事は、

おぬねを一つ辞さう。
さて此がおぬねと。さてとお双ふたりき。次のつづの染めよう。

○ぬべーぬうりぬをとぬくんぬじよどもほだまく

卷之三

四〇

後十八 うがふのまくらをまくらあわせかがまくらぬえぬとありや
ね三 うれりもんかくまくらをいたれれおされぬぞかまこあらまくら
後十九 よくもがくまくらをほとくまくらおさくまきぬあらま
四十 まくらをとどかくつきぬまくらあまくら神もくらぬバウリホ
中勢 中勢ナセ 不どちかくきぬあまおをいとれをまくらをうみてまくらん
五十 まくら尾上のまくらうきぬまとたぐーー、毛がたあすれめや
此様のぬき。今の人もまくらは寝て。告示といふ。あのまくらいも。たまゆらぬを
くべきをぞ。まくらをまくらだりとまくらをばかくらだりもと
くらをまくらをまくらをばかくらだりとまくらをばかくらだりとまくらをば
くづくづくにとりひきぬうととりひきをばかくらだりとまくらをば
くづくづくととりふかほとぐひこかむびとし。うかとえとし。左の人ハナラヤ
エラムラカシ。人の公換をみてき張り。旗をさすとまくらはまくら
三牛の村のあまくらよあまくら。けあまくら。考究の唐からだよあまくら。
めく代へうまそ。海のまくらばかくら。まくらばかくらとまくらばかくら

〇はつと上件のぬくねくじて回まくら。がくハナラヤぬくねくじて
をつてとくねくじてとくねくじてとくねくじてとくねくじてとくね
あくねくじてとくねくじてとくねくじてとくねくじてとくね
つあくねくじてとくねくじてとくねくじてとくねくじてとくね
らーとくねくじてとくねくじてとくねくじてとくねくじてとくね
あくねくじてとくねくじてとくねくじてとくねくじてとくね
又まくらぬくねくじてとくねくじてとくねくじてとくねくじてとくね

てこよみてとくらへし。又てぬとまことのまへをうなづき。

後
三
かくまくちうでよ成やもつう
てぬ元のまくはもうつとまくへく

「よやまや。」
「あぬ前は後乃宮の御子であつて、海と山の間を
は二つちねき不のこのぬうれば。そのゆうべ今ハ」とかくおうひて
シドモトアラムヘテシタマリ

ぬ
ゆる
ゆき
十九日
上々生つ
よを下
か三十二日
う
うる
う

○此十日辰のてふをもはそのへを。辰の人つても得らどかかれば。まくい
く豆紀までとどき。こまくまづけ下分三十三辰より是三十八辰までの六辰。
かひるの
六辰ともやの十日辰とを同ト格ふるゆゑ。従ふしう下の云後の言ハシムとへど。

卷之三

き。かくのとくにその時もむりへ難ぐて三脚あむひとづけにて後の脚を、
苦絶してかまししと下の六段の脚あらがふ。もと他の脚の筋の筋と。そのやう
の筋の筋と同じく筋すじよ。もとの筋の筋ハ筋。しめし。かくのとくじ
がト筋きて。もとの筋をめとくとて。ひくハ筋を下の六段の脚をきかくのとく
筋をりて今何をもとむるかとくとて。ひくハ筋を下の六段の脚をきかくのとく
上の手をもとむるかとくとて。筋の筋を下に走て下へ下へく筋
をも。もの下がりある辞よりてうまし。もの例を一つ二つりん。さりゆゑを引
ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。
ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。
ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。
ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。
ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。ひく。

かましとく可為ハモベシとひてもくべーとハ筋を勿為をもとつい
て。もくかとハ筋を出る。もく筋ももと定チテ筋ありて。古人もきのうしらや
すうとねうり一派。古び人もととすとハ筋やすうとく。また又自他のうしら
て。十四段の筋と下は六段の筋と。二筋余る多個もあり。もと例をつくる
解。ハメづくらすをつける。もく筋をもとつけて。十四段の筋を。付
き。もく筋。ハメづくらすは。もく筋をもとつけて。十四段の筋。付
く。もく筋。ハメづくらす。もく筋をもとつけて。下は六段の筋あら折玉
筋。切玉。破玉。多と曰ド。付筋をもく筋へスミシテ多
もく筋をつける。品。もく筋をもとつけて。下の六段の筋を。付

まへり。かくうなりて。じ十四の核し物も。がくとんたのじ。ハ。異のむ
こと。たのじとひそひ。下はおほの核し物も。ものじよ。ハ。ものじの
じ。まつひ。此十四の核も續つて、いふ。沈ちも。流ちも。かとじよト。ば
ねうれり。かくう人共一。後生の人八件の自化のきうちくに付す。或も
あらうと。あらうと。人それもとと一つぶんに。うまい。あらうと。と
て。かきこむと。ひ。アリ。たまぬ。かきこむと。ひ。安靜がゆく
あらう。ものもとつよ。ま第よ令憑と。令。ま附体とて。人をそそね
ふまく。がくと。おじと。公署し。又あせみ。かきこむと。おきそ
ひ。ひ。まく。古。人。アリ。たまぬ。おきそ。と。あらう。そつハ
ゆく。まく。古。人。アリ。たまぬ。おきそ。と。あらう。そつハ

アラモテハ十四段の舞ハ左の如くシテノ
トナリニテモテアラモテハ左の如くシテノ

ん

卷
分三十九版

○んはまくあまうす。そはんとつべき和を。上のが、まくあまうす。
か、とほりし。えんやとつべきを。めやとりまくわ。れんやとれんやと
ゆう先やと。とくはまくを裏へくして。ほよくつぶの辞しをやのす。おはまや
のうりへり。下をどどもとあらぬもんをねじて。めくとく。
右十 花りあきうめ
右二 へそのうへまくあらう。とまたまくめ
左一 らめと年ゆゑ人ぞう

口 = 真ざまのまゝもあり あり どりむさんとハイのうるうなま
件乃んと先よの格ともハキラヒテクシテウタモアモアモアモアモ
トヤマテミハドモアモアモアモアモアモアモアモアモアモアモ

七八

ら
え

卷之三

○上又ぬ又つをひきてやんあうちてんつとおおづく

○かみぬくあすから

今、そぞろと歩く者たちの多くは、
まことに、この風景をうなづいてゐるらしく、
そのうちの一人が、

日 ひがやどふきのからみ。主ひるがふのくわくのそふらん。
日 四 秋森アラシ。風とれば、アリのよ下とよもかくのそくらん
日 十 あらうえはまくにちやぢて、うらひどくのくわくのそくらん
日 十二 秋雲アリ。かきあそび。おまにさへかきへ人の志一からん
日 十三 あらとづくね。むかせね。地とらひ。おののくわくらん
日 一四 うねはまじ。のまへおらしきに。うみんとの人のそくらん
日 一五 ぬり置アリ。みぬれ。わらふまか人乃。のあはれ。もらん
日 一六 ひの井は浅き。こもと。おお新ぞり。おとしの人の見ゆらん
日 一七 秋風。おがも。もくすくに。人乃うちのえふるらん
日 一八 ふのあをい。ても上り。ひとかくそら。とあうそら
日 一九 えのり。とまき。と。うそら

古三

口三 何うへきと云はれとばかりに、うのむけうに事方にあきらめらん

口ハ

わがまかううじよの事と云はまつて人のこそそへかまへからん

口六

わがまかううじよの事と云はまつて人のこそそへかまへからん

二三 ハトナリの事へからだ

件の事とらんとハ結びて置く。譬ま事代新かよハアハビ。物

ゆゑを取てておもはし。おもはせかまへうかふ匂へう始ふ」古三

の氣へほく陸へそものきくいふ。消あへなまかたとるやうにまくは

結ひおもしりば。差とあるゆきとりまくを。まくに氣とるをゆゑ

を結ひく。何とぞおもへんとおもひまくらんとハ結び。結びバ

おとえゆる聲行ふ事とおもへんとつまむ。次ヨロニ詫かのむ

のゆくかまへう。まくへまくへまくへ

おとえ もとまれ。そのゆくへをまくへらん

のゆくかまへう。まくへまくへまくへ

○五の六

十

廉資毛

口ト播の

右三
もくへや今もひきとく　やまきとあらそをまきる　らん
人乃ゑのまくやまびとく　きみまく　秋月にのむくらかうらん
口二
こざごとくりのやまくさ　ほくまくとてんぞなまくよくらん
口一
うかまくやうをまく　まくおとくねやまくさ　ゆのこむらん
口四
船のまくまのまくとく　むだくまくはありでまくとく　らん
口五
たまくまく　き人のかくまくは　りのまくまくがめくまく　らん
このまくのらん　まく上　まくまくとく　橋まくらうふ　まく上　まくまくとく
まくまくまくまく橋　まくまくまくまく　まくまくまくまく　まくまくまくまく
まくへやまくのまくとく　まくまくまくまく　まくまくまくまく　まくまくまくまく
まくとくまくまく　まくまくまくまく　まくまくまくまく　まくまくまくまく
とくまくまくまく　まくまくまくまく　まくまくまくまく　まくまくまくまく
まくまくまくまく　まくまくまくまく　まくまくまくまく　まくまくまくまく
○人とまく　まくまく

九
に士
ひさごとあたびく志ぬとりふをばらまはきをかゑん
とまくん
日十六
根十六
日十七
根十七
日十八
根十八
日十九
根十九
日二十
根二十
日廿一
根廿一
日廿二
根廿二
日廿三
根廿三
日廿四
根廿四
日廿五
根廿五
日廿六
根廿六
日廿七
根廿七
日廿八
根廿八
日廿九
根廿九
日三十
根三十
日卅一
根卅一

後詰ハ くまくまとく事とをあざわらひゆきよやもとわまんトモクン

千上 こへへさんさうどおもそやまくら川 ふうきとまがれくまんトモクン

こまくはよ何あまひやまとくまほの舞アラ

おハ せや城かくつへくのもくテイ ハづふやいふちうんトモクン

あまひ何を二つまゆう

日立 まごとあやねうとからう巻マツタケとるみぞ人乃とそんトモクン

金三 ぬ日よりはよそのふべ乃秋音のたとがまふのとそんトモクン

こねうは庭の舞マツタケとぞのさじゆふまくすりかまう

鹿詰 ようれぢはるめりうすらをかまきとらけきをあきかんトモクン

日十七 ひをぬうりかきの川駆不るまくくまきとらけくまんトモクン

日十九 みやこへせりまゆまく川 亂いきくへうるがみすにあまんトモクン

くやくはぞのや何のとそくわー

後詰 きのふりあそびマツタケをかうおこうちせやぬ日あめおやうりトモクン

新詰 さうくまちるをのほとつひくもづきのまくふあまんトモクン

後詰 ほどておくまちるの音をちぎりてもえがくもやまドトモクン

あまひばんとくまくとがくまんとそく

○らんをまひまゆ

後詰 三 ままれさんまき色相マツタケらんトモクンとまほりひふこせよ

きん

き先

十一後

（五）六

十二

○よまかえてをまきてあきんてきんとくらむすにあきんとうひのす。
てきんハモラム

五十五 こがた先とくもかづくつめはものほぐかあ。まうとくとあすそ **せんう**
八十 たきのまみちくへつ自キアリテキトミヤシホ人をきて **せん**
元浦 事へあへ人乃かくまむをだぐれをまやして **せん**まざやうまく
住み 爰どくみる火桶のふきやヨリ **せん**あまくおのをねてたうね
○きるかずのまふゑふきん

古十五 ゆせかのとさくはし地をかとせ川。ヨリカとあくにまくれを免 **せん**
ここハよまかす。かわくまちんと同ド根字。ゆくとアホニカレモウラム。何トモ
あと歌にまわれを免きんとづまきのまく。法事奉行モトフ言を加へてんねべ

○きん二つうのす

抜え わきとあまとばとくはうだ先 **せん**すりにぬとまごやを **せん**
乃七 いやへイアラモ **せん**人のうとめつまぬえまう **せん**あせせせを原
○かくんのまけきん

古古 ひづきらむきせまくらまほひイコフサ人あらむせまげ **せん**
井せせ ひづきをだくつう脇クをまつうひ乃ほのしもととつとたク **せん**
秋浦二 桜くら花ちくばキ **せん**玉傳とおきりがくふきうてかくん
集金表 **せん**よのせんとハをうり別也。よかくんをよかくん。みくじんとみくじんと
うふ。かくんをかくんとハをうり。此詩手写本にま。せきも左風の歌本より

なん

みぞ

身口十二絃

○五のそや

〇三

つてはせんをすむと

○形よきのさん 此機二つま。和ノ内六かさと、すこまらすりて

古ま 卫士と莫少ことやまととはとおき人の、アミナキホセたう

まくさんざくさんぶくさんまくさん

御さんとくへり

後十七 りもむくへりもじねを至るばかりとす一萬のアラモヘあほかさん

まくさんまくさんじうさんまくさん

アリゴミのとくへり

桂セ 王ぐくひみひめめぢまんわくバ今一まじ乃みゆきとくさん

たさんまくさんわくさんまくさん

のむぐひと

古十三 人／＼とぬ正が多ひじむまちをとひ／＼がくふくらと林みさん

まくさんまくさんまくさんまくさんまくさんまくさん

べちうんのとくひ様不

古十一 ものをつらうで年あるじうにちるよこうま／＼とあくさん

まくさんまくさんまくさんまくさん

おさんとくひとく

古九 ものをとくへりとくへりとくへりとくへりとくへりとくへりとくへり

のとあわりてとくへりとくへり

かくへりとくへり

古八 人をとどたりとくへりとくへりとくへりとくへりとくへりとくへり

のとあわりてとくへりとくへり

かくへりとくへり

古七 あゆみのうづきりやまくらじうにまくのをぞうりとくへり

まくさんまくさんまくさんまくさん

のとくへり

新葉 喜日山をのへの言とまくえアキとぬりとけ生べの新葉つま

まくさんまくさんまくさんまくさん

まくさんとくへり

曰士 事にてばきゅうからりちおどるゝもが、うらも、かくらけ
曰古 あくをめゆくべきしとちとまくびとよす、あと風へよせ
曰す ぬづばもあをよす、ぬづばうちえんをねりひつて
曰子 年ねうをほさんとをがく、直あおハイとごづきを、うりとそへ
曰佐 えれ未の月ハヤとくつりよそとやどりて、あおね、まことを
後古 さをアラサキをみきを、ち砂け尾上のこまつきてと、いと
ま木 まれあきて、ゑもつまくアラキをゆく人を、あとの実、じと五
あの核も、うきのゆに立て、じとを取よまし、但し、えきせて、へめき、あよ
アツぐハ、ほよのさんと、口ド核されど、まきあまくらうを立て、おうくと、おのね
うきとは、口核すと、どもほよのさんひ枝も、まきさんへまくらうを立て、ま
うきとは、口核すと、どもほよのさんひ枝も、まきさんへまくらうを立て、ま

か二つの核の中には上のかさとをまらの本へ導くをつぶむ事と法言をもと深
考せ三段よりオ此へはまでの六段の核の言し。次のえとせてへめと五の方ハ告教十九段とう
考本ニ便りその十四段の言シ。かくのゆく定まね中にもよりてきてさんといふ上乃
言のミハウはナセ段の言六段の言。二つを不透りつよ核シ。御さん人の御もぬきめうとと
シヒ。アシテさんの人々ハアるを足ゆきありども、かくのナセ段の核の言シ。又あらま
さんのうハアリとのもひて。アリとハヘモビ。アシテさんのおきハアリとつてひ
て。アリトヘイもどとヨクハクの六段の核の言うり

はる
とくのつやにとまることもなしとひ
ことばとの二ふ様もうとす。本ハくちを扶ぶ御事。おなじほの様うとぞ。
きさんといふべき様うれどとさへひぐにあふこそへとうて。がづく御ふとおれ
徒士
とみやせんとくらめ山アツム人とたゞくとかづりきと
こととくさんのかの志度の様の言の内。えけせてへめとゑよつてくま
とまれど。きさんといふべき様それた。ほいひがくき。きさんといひ。がの
づくやまとくあの原氏のあとは。まべて。おおきのまくは。中古葉の後
みて。はきすりのゆくみはひがくき。まきかくのゆ。おはりときくげとくまくと言
ひ
はう。かひきるかん月にひつゝとよくお見
る十七
きま

○古事記
「**ミモアシ**、**ミンヒ**と**スベキ**。**ミシカ**、**ミシカ**と**スベ**。但し、**ヨリ**、**ト**と**ラシバ**。
ラシバ、**ラシバ**と**セヒ**て**セヒ**まくと**セヒ**まく。**ミハフ**の**ミハフ**
来て、**ミハフ**の**ミハフ**の上ノが**ミハフ**。そと、**ミハフ**の**ミハフ**。その**ヤハ**、**カド**の**詩**未
く**例**か。後後タセ、**ミハフ**に**ミハフ**も**ミハフ**。よと、**ハシ**と**ハシ**と**ハシ**。
ミハフと**ミハフ**と**ミハフ**と**ミハフ**と**ミハフ**と**ミハフ**と**ミハフ**と**ミハフ**。
ミハフと**ミハフ**と**ミハフ**と**ミハフ**と**ミハフ**と**ミハフ**と**ミハフ**と**ミハフ**。
ミハフと**ミハフ**と**ミハフ**と**ミハフ**と**ミハフ**と**ミハフ**と**ミハフ**と**ミハフ**。

○あんニツブテキ

古ニ
レニシテウツヤトミラウミン シミシナリウクホヘリミサメアテミン
ニミハニツミトホツミのミンシ

後又
タモトナはあれ川水モラセラミン モニシキモナクタドミタリミン
第一 やあ、とまはりをミン 喜日生をミン 喜の日キマセタミン

○そのことに至るあん

古十
ムリヤトヨリモミシテミキツマセヤ、**ミン** **ミン** トモシテウセアレミン

後土
カクミン。トウシナリミリタケの見をいきぐの儀乃モリモヨウカバ
六帖
カクミン。トウシナリミリタケの見をいきぐの儀乃モリモヨウカバ
好美
ヨウセトグ種もろとえ乃花のつうをちきミン 摂と、**ミン** トモシテアラ
跡陰記
喜れ未免ミン ちくとコロビミン 摂と、

けさんを。さよハレとまれあく。石のかハミシテ、えりく
うど。文車にもいとむち。古の車。車へと人まろぐ下

アタヒトカツクル。アラウクル。シ。狂七の毫
文事は繁多あくつべ。モケクルを上代みかむとひづり。
ノリモキヒ。シヒギラム。アラクルをうそば。アラホシの毫がまこ

ま
ニミトトコモハ。モクシム
キテ。御達三教乃外アリ。

○歌よをまくハんを延べゆく嘗て。ちくさんとりゆと同ドミ
アリ。おきどんとつべき事代。皆まことひそハタハぬとあり。
みあら色ハ右のう又文をつゝく味むにて見たまふ。種々を
後世けりはらんすんをぐりべき事多し。みぐりにまつとつるむ
シモナウヘアリ。アリ。唱るもむがとしお清べき辞也。

このままで帰るか。初まは革ハ不のまのまどと一つアリシテ。まど
リモトアシキモアシキぞう。かつ不のまのまどモドハ。別ルトニ出せう。
○あまくしてすと上ふあてをあきてといひ。

○左きもは例を考へり。まことに法づハあらへ上よむとつ辞生
了。叶やハモモ。そのや行ふじめかに
別。うう。三のまに生む。

古
元のどよのうひあくをよそへまくわうきあ
日
ゆふすりへはくわくをひーりとはよどよとひそ
日
うそぐれ神うそてぞめむま、まぐつかまう
日
よおやじくもて様ひあうせむまくうものぞをか
日
うちあくハあのどく上ホギリト、うふをつくべ。
又下よりうそて。上ホキリト、うふをつくべ。

後語一 又人かくとてあかまき きざうる翁の後の、おおきりせを

おおきすれじよわまきとぞひしてまきの月のこもうちうせや

又上りやうじはさきハ

後語二 よそ小まき神ぐらふむぢー衣衣もとどに花も見だゼアノア
アノをへくそも人もあきゆるにかうしぬねをうとあ

スニに上みぞりトあきくへとされし。但一や何あぢーかアーモス。その
あきとまし。又アノをアノ地をあく。あくふも上ヨモのをきじめ。

○まきをけきハ地をのまきー地をキーやマキヤモモといて。とひり。又

○まきかぞと上よいへぞ。まきーとソレで地を格しませぞもほド。又

せたと上よいへぞ。もくハまきーと地を。あくの邊あ三の毛をのひよせを。

○下の詞へづくキ

源氏夕景かどなば身久もまき まきのまきと人のこえふとゆと神とね

千士 ちまくのうちまき まきあらへばあまくばーのまきもま

○まき二つあらま

古一 まきこまくばるハまきもまき まきまきとハ行りた花とえ

○一へのまき

古一 まき人をぬまくがむかはらつまきのちうきん後ぞこくま

千九 まきうちれまきかもかまくまきにまき一満まきうだぞくま

秋ハ 茶さんとまきん人をあたまをもくとまきのまきとこのま

秋ハ まきは乃池もつしきまきとがふ藤うづきとまきとまき

送三 残をどうかまうてぞを乃ちる

さ

けす。ハニが上ふぞりをあらとつものまへた。ソムシテウツモ、一つの
格シモノミハ。ボリにアモキベキトカレヒトカレヒトカレヒトカレヒトカレヒトカレ
レキ。御子カマウリス。始めのうきそいだ。がのちうきん後ナリモトカ
ベキ。モタモトカマウリス。やのれのちうきん後ホモセキナリカモトカ
ベキ。ラジモタモタモカマウリス。

又

ナハ おりひきん人をぞとふらむ

さ

けす。ハニが上ふぞりをあらとつものまへた。ソムシテウツモ、一つの
格シモノミハ。ボリにアモキベキトカレヒトカレヒトカレヒトカレヒトカレヒトカレ
レキ。御子カマウリス。始めのうきそいだ。がのちうきん後ナリモトカ
ベキ。モタモトカマウリス。やのれのちうきん後ホモセキナリカモトカ
ベキ。ラジモタモタモカマウリス。

○モド 不のこゑハモーとハ本より別き。譯されぬ。ソラヘ久シテ
モシ

但十 無事ナヘヌモ

ま

まほ 何ハシメ集つてぞ。体いだまく。物乃く。詰ぬゆまへま
は辞ハシヤ一とよかぬなり。まほ在ふたのあ文ニハ。ソムシテウツモ、
モタモトカマウリス。ハリトヒリ。ソムシテウツモ、モタモトカマウリス。
雅言ニハシヤ一とよかぬなり。まほ在ふたのあ文ニハ。ソムシテウツモ、
モタモトカマウリス。ハリトヒリ。ソムシテウツモ、モタモトカマウリス。

らし 附

モビ

○ラーハらんのちうきん後ナリ。詩主。翁ひのまへと詠きとのまうせと
ゆめをだ。おきうたを考るに。よきうとのふかく。ソムシテウツモ、一つの
の格シモノミハ。ボリにアモキベキトカレヒトカレヒトカレヒトカレヒトカレヒトカレ
レキ。御子カマウリス。始めのうきそいだ。がのちうきん後ナリモトカ
ベキ。モタモトカマウリス。やのれのちうきん後ホモセキナリカモトカ
ベキ。ラジモタモタモカマウリス。

○五はを六

〇十九

ておきしものかべある。こねへつま。

○あじあじかん
○あじあじかんのん

○きし一色ハ先づ其のまゝに。らむふきのまゝに。かた乃

○尔きしと。上ふみをおきて。又きしと。きしある。下に。毛あき床
てもよめり。上うぞと。うぞと。うぞと。うぞと。うぞと。うぞと。
□□

おまかせすまうりゆくまよひと人のあうぞかき
延年院 さくらんぼのあうぞかき

本居宣長著　新古今和歌集

○五はを六

はあべはにひよとよへり。べき可のまきしのきハ。あきのきのあくま
うさ。べるのきい。まか。一からまか。アキシトロカシ。

法

○てふかく

古物ふ秋を加す。たきみち。つ。うらひゆをかぎり。五へを
月

みみへく。とく。つ。ぞめくをもん。あたる。と、ちりば
日

日え。見る。つ。人を。とてとゆゆ。神を。そを。うやまく。れを
日七

春日節。うかき。つ。美代を。いとふん。と。神。ぞ。まく。ん
日土

あふたとは。まか。うか。ふか。神。の。まく。つ。立。ほ。か。那

たの。よ。う。い。の。つ。ハ。て。と。り。く。と。よ。く。但。一。て。ハ。立。く。つ。も。使。く。

まうかふ。つ。と。り。べき。而。も。て。と。ハ。い。そ。う。と。と。と。り。べき。不。も。つ。と。り。ひ

て。ハ。う。か。ハ。な。と。か。り。お。て。ハ。立。く。つ。ハ。狹。き。ゆ。き。と。一。の。例。ま。り。で。い。ま。る。割

よ。坐。て。立。く。と。う。も。先。考。に。坐。て。後。考。立。く。よ。き。り。ひ。又。不。き。く。と

立。く。よ。う。と。日。防。り。お。交。る。お。と。り。も。御。ま。る。に。き。く。つ。立。く。よ。う。と。ハ。喜。に

き。く。と。立。く。と。日。防。お。交。る。お。と。り。ふ。辟。え。先。考。立。く。後。考。立。く。よ

り。ひ。く。く。と。ま。べ。て。つ。ハ。坐。く。と。も。立。く。と。う。か。き。立。く。と。お。ま。ぐ。て。立。く。ま。い
ふ。げ。お。ふ。上。お。り。ふ。も。と。下。に。り。か。り。と。た。が。い。お。日。時。お。ま。ぐ。る。時。ふ。そ。の。中

間。立。く。立。く。舞。え。珍。ふ。後。世。の。人。お。け。ち。だ。を。ま。る。に。ま。ぐ。く。と。て。と。り。ま。ん
お。り。お。お。し。ま。く。舞。え。び。ぐ。り。に。き。り。と。つ。と。り。ふ。む。が。ま。じ。と。と。つ。に。う

え。立。く。ハ。て。お。通。り。が。ま。れ。而。あ。り。と。ま。べ。く。

古ニ山里を秋了をあとふるびタリ森のなぐねふるをタヒ
曰六 茄枝根乃おのれどとふ主とよも まけみやあは後アハシをあひ
後三 り川の生ちうをくさんさくらむふりかげふのとえをさせ
曰八 天の川を一にせあざやうりうシマツツケ渢尔神をゆき
ねタマゑをあわうみつタマああはうとふをししの名をされ
古ニタマのうひのつハありにわとど上へうす様あるあふ。申ふうも口ド
とあそぶ件トキつとくタクき。

古土 あねアネああいきタマ うねは冥のこきに年をあうね
曰三 きの先タマ あそで年寄シテうそにあらんと人をあらせん
曰十五 月夜すはまな人タマかきうりゑとあらんタマ も称タマ

曰 人タマあらかまタマばうびタマ もあきあざとよふらを生タマよ
後四 あらかじゑがほ根の和玉タマとくしとえタマ もねねむ武
とまタマはるうひのつハタマとつあきひて生タマ。あれど上のつと
別タマにそうびタマ。下タマは中にかのづタマかくすタマがううう。
さくひタマかくすタマがくすタマ すタマ。下タマにとをほすタマがくきも。壁タマ
てとりひてとよーきあうタマつタマとへとととりひも
ようタマ。とてよタマとハタマ。即タマくうタマとくタマふせう
○下タマにあらうをゆくえてりひもタマく
古一 嘉タマがまタマたてタマやうごみタマめタマきのゆきあうタマ
きタマかくすタマくタマとくタマなねととつタマとくタマとくタマ

まへすて御とおきとよといふまへくぐり

ゑがたを喜び生ふ出で立ちまつじめ夜子未吉をせう
東へまへるをききおはなはる葉をとひふんをふくも

ひきうわがふくばくもく度みのあいをもと主から
主うへて見せゆよとゆくも

日 やどうせ一人乃かこりあらやうとくにほふ、表
主まわひて御とおきとよといふまへくぐり世人の形とよと

日 六 風笛をばあつたりぢ榮あきよみちぬ新まへ度小弓
主うへて見せゆよとゆくも

日 六 うへみけ年のまうにまうがふもじげおとくまう

日 土 うきまうへ老りそゆくよとくぞり
主まわひて御とおきとよといふまへくぐり

日 土 うきまうへ老りそゆくよとくぞり
主まわひて御とおきとよといふまへくぐり

日 土 えきれをうきまうへ老りそゆくよとくぞり
主まわひて御とおきとよといふまへくぐり

日 内十三 うきまうへゆきてへまうへ老りそゆくよとくぞり
主まわひて御とおきとよといふまへくぐり

日 土 あけぬそでかうむよばんたとてゑもうそももうそも
主まわひて御とおきとよといふまへくぐり

日 花をうへにせうへとひハ高きシミアムのうきまう

ひもがとて下にのこすとてよ

○十え あをやくはやくありのめくむぐじのゆきとをたちまされ
主生されつまをへえうべきよとゆくそく

後云 秋の西よりかのい不むる方あくみぬれうとでハあおゆき

彦ホセとて秋の夜と夕からぬまびらきとつまくとせ

抜一 妻のゆき、うきよきのあをよふのうりうを人よもと

人よもとづりゆくものうもとよとふくそく

左のうきのうきつとつ人もと。上へうくるを。苦酒のかふまくめ
ア。そのふくをとくとハ。一首の歌をよく嘆きば。おづくふうしてあく

あくの歌を。初まのうとがく。げ極きやくにむだうをかく

詩六 四みけくにうち出でるれハ白妙のすゞはる松小雪ハゆく
ひあは美葉ニミテ。袖をなごう。三の丸引く。袖の白をハるくと
わく。明体引方に今のかく。入へと。白のとくしてかく。
ありとくはなも。りーつとあく。かくえふくとくをばく。ありとく
けふあく。あをと優うし。せんとくのとへき。あくとく。あくとく
うきく。後までお詫わとどき。とくをくとくをく。あくとく。あくとく。

加ふ

○ねよきかみハ。かといふ舞ふを傳ふゆめし。みはくとくし。みがくとく
ふくとくべきあを。かとのういとくとかく。ほのきかの歌ふをせうめし。え
き葉みがくくぶく。後よきかといふまく。きかとく。哉まく。不
そともかくとく。日本紀。まく。かみハ上のかくを。後の一毛弓
はまく。かくとく。後まく。まく。まく。二つ三つ。がくまく

出せうがまく。ぞやほそものかくにまゆるを。ととかくがはふあきこ。
古一 喜やうれえやあそびときてよかんまじひさくふも聞をとみうか
曰 まちこちおもづきもまゆふ中おひねつらきもとこもうか
曰 ハ じまくもまちあくかごとの牛のうでと人よわれうくか
曰 土 ほうきくはるやう月のうやまとまらやめとまなれどまう
次ノ後うもあり

古二 まぐり人とこなゆとあうぐへきの竹つ枝まくアテヌト
曰 あくま山まくきつりよぬりまけとあくふ年をゆく
曰 ほきとあた人をくとみて山毛乃あくべきすすんでみだつ
曰 土 秋のせうりみままでまつものまのす絆ふれをひかう

沙子のとくまことなか

古一 まぐり人をくとみのむとあうぐへきの竹つ枝まくアテヌト
曰 かまくらんはをくとみてえまほほくと人のたりあゆう
陸一 あくとくあくよ松の竹差はくとみてとふ人のあひ
曰 土 あくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
次ノもとかまくはいとまればれう
古二 うにうがくまをせぬあくよ松の竹差はくとくとくとく
曰 うをへくかあくうかひまくまくまくのかがくをあくにま
○りくまのわ

四
十三

まくらより又多く

卷之三

十一

養とアモルカリ等、胸中にうつてはる地とあり。此のうち
佐久ひきん大帖

四

この事はあくまでもおもてをりどき。云はば御心は御心であつたうをりて、

3

之
此
也
也
也

三

アリーハ木の木をあらわす。木の木をあらわす。

2

卷之二

後十

正門乃一ひきだりをかん悉くたまきのあめとこぬ
うる

1

卷之三

「こゝへまく／＼ひきか／＼とゆが／＼とほ。ま／＼えり／＼ぬを。ゆ／＼うが／＼てりよ」

5

蜀
附

○
あ

〔
よそもぐみとゆく。あらまくかをゆく。ひきのゆく。あらま
〕

卷二

かを擱りておまかせたてまへは是擱りて移す

七

かくしてさあむかくにまわづくらあがハシ代ようじよ
とづき

三

卷之三

卷之三

〇六六

かさ

日々 ちうちふくらめ 緑あきよせんり おほ人の、まつをまく。と
色がふくでくとまか。かまはそむきし。
かを情てつゆのうをうなへす。

金
三
秋のうで涼風よしと秋をきく
[]
[]
[]

西風の吹き止む。又一聲。みづのうみ色あか。後日未時十二やまくまで寝か
まし。ぬをあくあくてかまふく。その月を見し。かか。新月をさう。不の月とし月を
見し。と。つまゆらの宿みなまでこし。まよ。新月換十一。數たて。まくまで。まゆら
見る。かく。まゆらの櫻を。櫻と。また。そ。かく。まゆらのうみ。

赤壁
まやこゆきのうみかみのそよぎのまゆる
赤壁

文本
俊義 いそかくままでけらきのすくうきをへられやが
、こゝで静まし。文事よハおまとのゆ一がる事一。このゆふるもハおまち
十三秋の秋乃翁の月はいとよそやうもむうひてうりうるみ。新嘉慶十八

書傳　物語　みどりをまめにやくとあやしくさうにあくす。おとこは氏の書
あくとゆうとゆうとよへいづくとひのとよねる。おまめはまめ
うひまかき、さんまくとくのやうがまじう。うめくわくまわく

卷之三

古事記
アサヒノホル乃になへて
アガミ
アシヒのアカヒトモモホセん
アガミ
アリヒツキモアヒモモヌシガシモアヒモアシセアガミ

まゝ
きりかは月にうきをもみばかりのゆゑもふうせ
ううがう
えやうた人やーくちとちやうおとふおよひも
てうがふ

さうの案にやつて林の事とあつた。是ハつゆのうじよをうけ。○とゞこはつひどうをかどひきく。移ふきのうかを。かどひきく。とまよ

古十 あらうがへまくらのホトガ トガ かくもとくにだれと人アモせん
後云 さうふどせ色をがうへのまくもとまくまであくねくねよ色が
五八 此れ色ガハア奈アシトモテ

○志ガ トガ もぐかにふきト

古十 かひがねをそやおどり トガ ききと歌くよみわらすせうまやの中山
九十一 まそ後ズ トガ とよく殊尙おほんとまのをはくもとまの高きびでう
廿三 トガ

○ホトガ ホトガホホト

後十三 いせの海アラキアホリヨリキアホリ ホトガ はうじかてみをかづく
新集 やろうくいはきアホリキアホリ ホトガ のどうふをりてうきよまくさん
放云 ホトガ いとうすま日かきそんなり ホトガ ありそむふすくからわをせト

○トガ トガ てーぐかホト

古十 たかましー今と見 トガ

古十 たかましー今と見 トガ かかく乃かまし火とまくや万世アホトニ
四二 ありふらままおひべアトチムとそこまにちな旗庫 トガ
後士 いくかくてやまゆうすはいあづまむくのまゆもま見 トガ

此が万葉ノミ者

○トガ

古九 かひがねを称くふあー吹笛を人アト トガ やあくつせん

古九 かひがねを称くふあー吹笛を人アト トガ やあくつせん
五八 うづむせゆアヒ忠むくにまむきげつのホトガ トガ 五八 トガ
此れ万葉にあくつてアヒセモカのまみはーかくまく

ホトガ トガ あくつせんのかみ トガ トガ
ホトガ トガ あくつせんのかみ トガ トガ

○五八

○六九

如上。又如八例而一。

後
十二 玉がまきをうつすまくへのちまへせり色
33
み



